



## 年間第 20 主日 (ルカ 12:49-53)

イエスの投じた火を燃やし続ける

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」 (12・49)  
「火」は、2つの働きをもたらします。わたしたちの生活にイエスの投げ込む「火」が働き続けているか、振り返ることにしましょう。

赴任して4ヶ月、馴れ合いが生じてきたのか、子供たちの中には注意をしないといけないかなあと感じる子供が出てきました。念のため言っておきますが、わたしはもともと気が短いので、我慢ならないと思えば説教中でも降りて行って厳しく接することもあり得ます。

我慢ならない場合は飛び蹴りとか頭突きの可能性があります。用心しておいてください。頭突きはわたしの頭が痛いので、おしゃべりや手まぜをしている者同士の頭を思いきり衝突させることもあると思います。

いきなりはしません。態度が悪くて困るなあという子には、前もって警告をします。警告を受けた後でも反省する様子がなければそれはもう飛び蹴りです。仮にそういうことが起こったとしても、「さんざん警告を受けてのことだろうから」と受け止めていただきたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。イエスは「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」と仰います。「火」は2つの働きを持っていると思います。イエスの時代、電気がなかったことを考えると、火の働きの1つめは、「闇に光を照らす」という働きだったと思います。

暗闇は、違いがあるもの同士を区別できない世界です。正しい人と不正な人、正しい思いと不正な思いなど、暗闇の中でうごめくものがどのような人かどのような思いなのか、判断することは困難です。

そこに火が投げ込まれると、世界は変わってきます。暗闇は照らされ、正しい人は光のあるほうに近づいてきますが、不正な人は光を嫌い、光から遠ざかるのです。正しい思いを持つ人も光のほうに近づきますが、不正な思いをいだく人は光から離れるのです。

イエスが地上に投じる火も、暗闇の中で区別ができないものをはっきり区別します。それはまさに「分裂をもたらす火」です。一家に五人いて、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれる、そのような火です。たとえ家族の中であっても、神の望みにかなう人と神の望みに反する人はイエスが投じる火によって分裂してしまいます。分裂が明らかになって、自分がイエスの投じた火に近づこうとしているか避けようとしているかを考えます。イエスの火を避けようとしていたなら考えを改め、光に近づこうとすればよいのです。

「火」のもう1つの働きは、物を燃やすということです。火はそこに何か燃えるものがなければ燃え続けることはできません。燃えるものが尽きてしまえば、火はその場にとどまっていられないのです。イエスが投じた火もきつとそうです。何かに燃え移ることで働き続けるのです。

ここでさらに考える必要があります。人間が火を放つとき、何かを焼き尽くそうとして火を放つ場合と、火を保ち続けるために燃え移る材

料を差し出す場合とがあります。農業で焼き畑をする場合、一定の面積の草を焼き尽くそうと火を放っています。ところが焚き火などを行っている場合は、薪を燃やし尽くそうとして火に投げ込んでいるわけではありません。火を維持し続けるために材料を提供しているのです。

すると、イエスが投じる火も、燃え続けるうちにものの本質や結果が見えてきます。わたしの中にある思いが、焼き尽くされてしまうような思いであれば、イエスの火が投じられても、思いを焼き尽くした後に火は残らないでしょう。

しかし、わたしの中にある思いが、イエスが地上に投じる火を燃やし続けるために差し出される道具であるなら、イエスが投じた火はいつまでも燃え続け、火の働きは続くのではないのでしょうか。

イエスはすでに、地上に火を投ずるために来ました。イエスが投じた火は、どこで燃えているのでしょうか。焼き尽くされてしまうこの世の思いに火が燃え移って、もはやイエスの火は消えてしまったのでしょうか。わたしたちの中の何人かは、地上に投じられたイエスの火を燃やし続けるために差し出された薪であってほしいのです。

わたしも、イエスの思いをこの地上で燃え上がらせる薪でありたいと思います。ひょっとしたら、わたし自身は燃え尽きてしまうかもしれません。それでも、イエスがこの世に投じた火を燃やし続けるためなら悔いはありません。

振り返って、わたしたちの生活にイエスの投じた火は燃えているのでしょうか。イエスの火がわたしたちの心を照らし、神の望みにかなった思いとそうでない思いを分け、神の望みにかなう思いはイエスの火によっていよいよ燃え盛り、神の望みに反する思いは燃やし尽くされ、わたしたちの生活は人々にとって山の上にある町、家の中すべてを照らす光となっているのでしょうか。

「火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」(12・49) 「どんなに願っていることか」というイエスの思いを、わたしたちは十分に知ることができません。しかしイエスの火がこの世に燃え移るために、ご自身をおささげし、どんなに苦しまれたかはわかります。わたしたちの中に火が燃え移るようと、ご自身を燃やし尽くして差し出された火を、受け取ってくれる人が現れるのを願っているのです。

わたしの生き方が、家族の生き方が、イエスの投じた火を燃やし続けるのに差し出された道具となって、イエスの火を世に示すよう努力しましょう。イエスの火によって燃え尽きるはかないものを追い求めるのではなく、イエスの火を燃やし続ける価値あるものに目を留めましょう。

わたしたちがイエスの投じた火を燃やし続ける生活をするなら、火によって初めにもたらされる対立や分裂の先に、真の平和を手に入れることとなります。